

地域 SNS による被災地の地域コミュニティ再生に関する実証的研究

研究代表者

服部 哲

駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部 准教授

1 はじめに

2011年3月11日14時46分に発生した東日本大震災から6年が経過し、被災地ではハード面の整備が着実に進んでいる。本研究のフィールドとなっている宮城県亶理郡山元町も例外ではなく、子育て拠点の開設(2016年7月)、JR常磐線の再開(2016年12月)、地域交流センターのオープン(2017年10月)など、ハード面の整備が一步一步着実に進んでいる。政府は2016(平成28)年度から5年間を「復興・創生期間」と位置付け、被災者支援、住まいとまちの復興、産業・生業の再生、原子力災害からの復興・再生、「新しい東北」の創造という5分野における基本方針や具体的な取り組みを決定した(復興庁2016)。この方針が示すように、復興の力点はハードの支援からソフトの支援へと移行しつつある。本研究はソフトの支援として、地域コミュニティ再生に着目した。被災地の復興には地域コミュニティの再生が不可欠である。

一方、震災からの復旧・復興過程において、情報通信技術(Information and Communication Technology; ICT)の果たす役割が期待されている(総務省2012)。たとえば総務省は「被災地域情報化推進事業」を実施している(http://www.soumu.go.jp/shinsai/ict_fukkou_shien.html)。その中において本研究に特に関連するものとしては、「ICT地域のきずな再生・強化事業」がある。ICTによる地域の絆の再生は東日本大震災後に注目されたわけではない。たとえば平成19年版国民生活白書では、地域のつながりの再構築に向けた新たな動きとして地域SNS(Social Networking Service)が紹介されている(内閣府2007)。また、平成22年版情報通信白書では、ソーシャルメディア(ブログ、SNS、動画共有サイトなど)による地域の絆の再生や地域の活性化が議論されている(総務省2010)。本研究は、地域コミュニティ再生のために、地域の人と人のつながりがベースとなる地域SNSに着目した。しかし、被災地に地域SNSを導入するだけでは不十分であり、パソコンやインターネットなどのICTに不慣れた人たちが、ICTリテラシーを向上させたり、ICTに慣れ親しんだりするための場も必要である(日本経済団体連合会2011)。ICTの活用による被災地の地域コミュニティ再生に対する課題については、橋爪(2014)も議論しており、サポート体制や、地元住民の意欲の維持・向上を促進することの必要性を指摘した。また、ICTの活用に取り組む際に発生するコミュニケーションの可能性も指摘した。

本研究の目的は、山元町をフィールドとし、被災地の地元住民がICTリテラシーを学びあうための場と、それを生かしてコミュニケーションや情報発信を可能にする地域SNSを定着させる過程を通し、復興が進展している被災地の地域コミュニティ再生における地域SNSの可能性を追究することにある。そのため本研究では、(1)ICTリテラシーの学びあいの場である「山元町パソコン愛好会」の参与観察、(2)地域SNS利用状況や効果の分析、(3)愛好会メンバーへのアンケート(調査票)調査とヒアリング(インタビュー)調査を行う。従来、ICTによる被災地の復興支援として、ブロードバンド環境やICT基盤が整備されてきた。本研究で提示するICTリテラシー学びあいの場と地域SNSの結合は、地元住民の自律的な取り組みにもとづくコミュニティ再生と一体となったICT導入の新しいアプローチである。その効果を実証することができれば、ICTによる被災地の復興支援を考える際のひとつのモデルとなりうる。

2 ICTリテラシーの学びあいの場「山元町パソコン愛好会」の活動状況

2-1 愛好会の経緯と概要

愛好会は、2012年度に開催された山元町教育委員会主催(主管は山元町教育委員会生涯学習課)によるパソコン教室に参加した地元住民が中心となって立ち上げ、2013年4月から活動を開始した。メンバー数の増減はあるが、毎年4月現在のメンバー数を平均すると20名ほどであり、2017年4月現在のメンバー数は21名である。愛好会発足当初からのメンバーは9名であり、そのうち8名はパソコン教室から参加している。それ以外のメンバーは愛好会発足後に参加するようになった。そのきっかけは、別のサークルのイベントにおいてメンバーが誘った、メンバーが友人を誘った、役場が発行している広報誌を見た、など様々であるが、愛好会のメンバーが複数のサークル活動に参加しており、その仲間を誘うことが多い。震災後に新しい住まいで独居となった人をメンバーが愛好会に誘い、外出やコミュニケーションのきっかけになった例もある。

また、震災後に山元町を離れてしまったが、愛好会に参加することによって、山元町を訪れるきっかけになっているメンバーもいる。

愛好会の運営として、発足当初から会長、副会長、会計、監事といった役員が置かれているが、2016年度からは毎年総会を開催したり、今後の活動内容についてメンバー同士で意見交換したりするなど、自立的に活動を展開している。

2-2 愛好会の活動状況

愛好会は毎月第4土曜・日曜の午前と午後に2時間ずつ活動している。各回の参加者は10から15名程度である。ワード、エクセル、デジタルカメラの学習が活動の中心であるが、パソコンやインターネットに関してわからないことなどを自由に相談できるようになっている。ワードやエクセルでは、年賀状、暑中見舞い、チラシ、カレンダーなどのテーマを設定している。またその際、デジタルカメラで撮影した写真をパソコンに取り込むことが多いため、そのために必要なファイル操作を関連スキルとして学習することも多々ある。年に数回、株式会社ニコンの有志が愛好会の活動に参加し、デジタルカメラによる撮影のコツなどのレクチャーを実施していただいている。愛好会のメンバーは全員、デジタルカメラを所有しており、ニコン有志による愛好会への協力は非常に好評である。

愛好会発足時から参加しているメンバーと発足後に参加したメンバーとの間に、パソコンスキルの差が見られることもある。その場合、発足当初は筆者を含む研究グループが基礎から教えていたが、徐々にメンバー同士で教えあうようになり、最近では、メンバーから教わった人が、さらに新入りのメンバーに教えるという場面もあり、愛好会が「学びあいの場」として機能している。

愛好会とそれ以外のサークル活動との相乗効果も見られる。たとえば、植生サークルの活動中に写真を撮影し、それを愛好会において利用している地域 SNS に投稿する、地区に自生しているツツジの手入れなどを行っているサークルのブログを立ち上げて情報発信する、食育サークルの活動記録用動画を制作するといった活動の広がりが見られた。

3. 「山元町パソコン愛好会」における地域 SNS 利用状況

3-1 愛好会用地域 SNS(山元町 SNS)の経緯と概要

愛好会では、河北新報社の地域 SNS「ふらっと」を利用してきたが(服部 2014)、2014年3月に「ふらっと」のコミュニティ機能が停止されたため、筆者が愛好会用に地域 SNS(以下、山元町 SNS)を構築し、2014年10月から利用を開始した。山元町 SNS のシステム要件として、(i)コミュニティ機能に特化し、(ii)ユーザ登録機能として招待制の仕組みを備える、この2点を考慮した。山元町 SNS の管理者は研究代表者(服部)であり、ユーザ登録は愛好会の活動時に行い、メンバー自身が所有しているメールアドレスまたは筆者が用意した無料のメールアドレスに招待メールを送信し、その場で SNS への登録が完了するようにしている。

3-2 山元町 SNS の利用状況

ここでは2017年6月10日現在の状況を整理する。

(1)登録者数

2017年6月10日現在、山元町 SNS の登録ユーザは30名である。その内訳は、18名が愛好会メンバー、7名が筆者を含む研究グループとその関係者(指導学生など)、残り5名がニコンの有志である。18名の中にはすでに愛好会を退会したメンバーも含まれている。

(2)投稿数

2017年6月10日現在における山元町 SNS へのトピックとコメントの投稿状況を表1に整理する。トピック投稿は332件であり、そのうち愛好会メンバーによる投稿が306件(92.2%)である。愛好会メンバー18名のうち13名がトピックを投稿したことがあるが、積極的に投稿しているメンバー(以下、積極的メンバー)は4名であり、その4名による投稿が278件(全トピック投稿数に対して83.7%、愛好会メンバーによる投稿数に対して90.8%)である。

同時点において、トピックに対するコメント投稿は1,116件である。同様に愛好会メンバーによるものが788件(70.6%)であり、愛好会メンバー18名のうち14名がコメントを投稿したことがある。積極的メンバー4

名によるコメント投稿は 668 件(全コメント投稿数に対して 59.9%, 愛好会メンバーによる投稿数に対して 84.8%)である。1つのトピックあたりのコメント数は平均 3.37(標準偏差 2.89)である。コメントが全く投稿されなかったトピックは 45 件であり、全トピック数の 13.6%である。

表1 トピックとコメントの投稿数

	全投稿数	愛好会メンバーによる投稿数	積極的メンバー4名による投稿数
トピック	332	306 (92.2% ^{*1})	278 (83.7% ^{*1} , 90.8% ^{*2})
コメント	1,116	788 (70.6% ^{*1})	668 (59.9% ^{*1} , 84.8% ^{*2})

*1 全投稿数に対する割合

*2 愛好会メンバーによる投稿数に対する割合

トピックに関しては、愛好会メンバー中の数名の積極的メンバーが 8 割強を投稿している。代表的な地域 SNS のひとつ「ごろっとやっちょろ」における積極的なメンバー数は全体の 1 割程度であることを考えると、山元町 SNS の積極的メンバー数もそれに近いといえることができるかもしれない(庄司他 2007)。一方、コメントに関しては同じ 4 名がトピックの投稿と同様に積極的に投稿しているが、その割合はトピックの場合よりも低くなる。逆に、他の愛好会メンバーや筆者を含む研究グループによる投稿の割合が増えている。この理由のひとつは、研究代表者自身が地域 SNS におけるコミュニケーションの潤滑油となるために、できる限りコメントするようにしていることが挙げられる。実際、研究代表者自身によるコメント投稿は 227 件(全コメント投稿数に対して 20.3%)となっている。

(3)投稿内容

トピックの投稿内容を見ると、地元や観光先の植物や景色が多く、その他に、地元の行事・催物、趣味、家族、町の復旧・復興状況などについての投稿がある。また、各回の愛好会の活動内容や様子もトピックとして投稿されている。

山元町 SNS では、トピックに写真を 3 枚まで貼り付けることが可能であるが、全体で 626 枚の写真が貼り付けられている。愛好会メンバーにより投稿されたトピックに限れば 620 枚(積極的メンバーによるものが 571 枚)の写真が貼り付けられている。コメントにも 3 枚まで写真を貼り付けることが可能であり、全体で 356 枚の写真が貼り付けられている。同様に愛好会メンバーによるものが 352 枚(積極的メンバーによるものが 311 枚)である。このように、写真についてはほぼ全てが愛好会メンバー(多くは積極的メンバー)によるものである。

(4)アクセスログ

本研究では、山元町 SNS のアクセス状況を分析するため、Google 社の提供する Google Analytics を導入している。図 1 は 2016 年 3 月 28 日から週単位でアクセスユーザ数を集計した結果をグラフ化したものである。図中の日付は愛好会が開催された週を示しており、グラフ上にはその週のアクセスユーザ数を表示している。Google analytics によって得られたアクセス状況を分析すると、図 1 に示すように、愛好会の活動日とその前後の週にユーザ数やセッション数が増加する傾向が見られる。ただし、そのようにならない場合も見られる。

愛好会の活動時に山元町 SNS の利用状況を訪ねると、積極的メンバー以外から「投稿はしないが、何日かに 1 回は(山元町 SNS を)見るようにしている」という意見が得られた。Google Analytics によって得られたアクセス状況によると、1セッションあたりのページ数は 4.85 であり、直帰率は 26.97%である。このことから、「山元町 SNS へログインし、数トピック閲覧し、その後、利用を終了する」というような行動をとっているであろうと推測される。

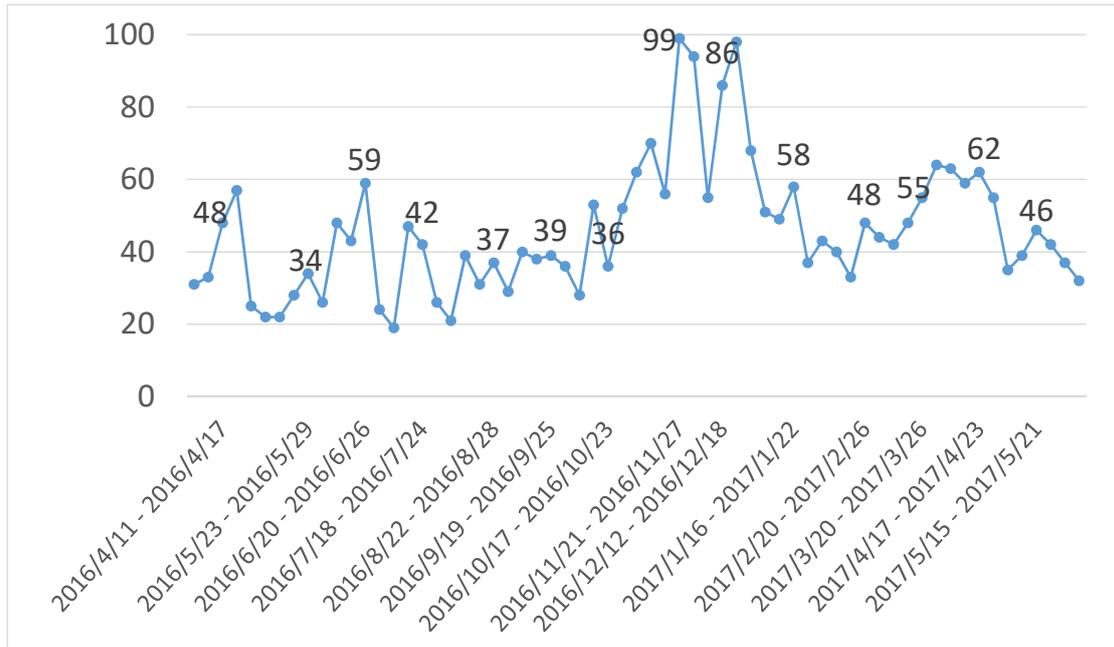


図1 山元町 SNS のアクセスユーザ数 (週単位で集計)
(2016年3月28日～2017年6月10日)

4. 調査票調査

4-1 調査内容

本研究では、2018年2月末日時点の愛好会全メンバーを対象に調査票調査を行った。調査内容は、愛好会の満足度、山元町 SNS の利用状況、パソコンやインターネットの利用状況、愛好会以外の団体・サークルへの参加状況、地域の人的ネットワーク、東日本大震災による生活の変化、居住地区の活動や変化、および年齢や性別、居住地区などである。

調査方法は基本的に調査票郵送によるが、調査期間後に入会される方や郵送による回答が得られなかった場合のため、Web ブラウザ経由で回答可能なオンラインフォームを利用し、郵送した調査票と同一内容の質問項目からなるフォームも用意し、参与観察の際にその場で回答していただけるようにした。

郵送による調査について、2018年3月12日に愛好会の全メンバー23名に調査票を郵送し、回答期限を2018年3月31日とした。結果として、23名全員から回答があり、回収率は100%である。本報告書執筆時点ではオンラインフォームからの回答はない。

4-2 調査結果

(1) 愛好会の満足度

愛好会について、「とても満足している」から「全く満足していない」までの5段階で評価していただいた。表2のように、ほぼ全員が満足しており、その主な理由としては、自由に何度も同じ質問をできるためパソコンの理解が深まったこと、パソコンの新しい使い方を知ることができたこと、町内の知り合いができたことなどである。1名は愛好会の満足度について「どちらともいえない」と回答したが、その理由は、参加回数が2回のため判断できないということであった。

表2 愛好会の満足度

	回答者数	割合
とても満足している	9	40.9%
満足している	12	54.5%
どちらともいえない	1	4.5%

満足していない	0	0.0%
全く満足していない	0	0.0%
計	22	100.0%
不明・無回答	1	

愛好会に参加してよかったと思うことを複数選択可で回答していただいた結果、「パソコンについて学ぶことができた」(20名)、「山元町の中で新しい知り合いを作ることができた」(19名)、「写真の撮り方やカメラの技術について学ぶことができた」(16名)、「パソコン愛好会以外の活動のためにパソコンを使うことができるようになった」(14名)、「パソコンやカメラ以外のことで新しいことを学ぶことができた」(12名)、「山元町の人たちと話をする機会になった」(12名)はいずれも半数以上の回答者が選択しており(表3)、愛好会の満足度の理由を裏付けている。

表3 愛好会に参加してよかったこと(複数選択可)

	回答者数
パソコンについて学ぶことができた	20
山元町の中で新しい知り合いを作ることができた	19
写真の撮り方やカメラの技術について学ぶことができた	16
パソコン愛好会以外の活動のためにパソコンを使うことができるようになった	14
パソコンやカメラ以外のことで新しいことを学ぶことができた	12
山元町の人たちと話をする機会になった	12
「山元町 SNS」で交流することができた	10
山元町の良さを新たに知ることができた、または、再確認することができた	9
パソコン愛好会以外の活動に参加するようになった	4
パソコン愛好会への参加が外出するきっかけとなった	2
東日本大震災後に山元町外へ引っ越した人たちと話をする機会になった	2
そのほか	2

(2)山元町 SNS の利用状況

この1年間のあいだの、山元町 SNS の利用頻度を質問した結果、回答者の半数は山元町 SNS を使用したことがなく、使用したことがある人では「パソコン愛好会のときのみ」が最も多く6名であった(表4)。

山元町 SNS の利用頻度が「パソコン愛好会のときのみ」以上の回答者に、山元町 SNS について、「とても楽しかった」から「全く楽しくない」までの5段階で評価していただいた。その結果、ほぼ全員が楽しかったと回答した(表5)。メンバー同士でのやり取りが楽しさの理由として挙げられているが、最近は投稿数が減っており、その点を指摘する意見もあった。

表4 山元町 SNS の利用頻度

	回答者数	割合
毎日	0	0.0%
週に5~6日	2	8.7%
週に3~4日	1	4.3%
週に1~2日	3	13.0%
パソコン愛好会のときのみ	6	26.1%
使ったことがない	11	47.8%
計	23	100.0%
不明・無回答	0	

表5 山元町 SNS の楽しさ

	回答者数	割合
とても楽しかった	3	25.0%

楽しかった	8	66.7%
どちらともいえない	1	8.3%
楽しくない	0	0.0%
全く楽しくない	0	0.0%
計	12	100.0%
不明・無回答	0	

(3)パソコンやインターネットの利用状況

自宅で自分が使えるパソコンの有無、パソコン利用頻度、携帯電話の種類、インターネット利用頻度の回答結果を図2、表6、表7、表8に整理する。ほぼ全員(22名)がパソコンを所有しており、利用頻度は「週1～2日以下」(9名)が多いが、毎日利用する回答者も4名あった。携帯電話についてはほぼ全員(22名)が所有しており、従来型の携帯電話よりスマートフォン所有がやや多い(前者9名、後者13名)。そしてインターネット利用については、毎日利用する回答者が8名で最も多く、半数以上は週5日以上利用している。自宅ではパソコンでインターネットを利用しない回答者は4名であったが、表8の不明・無回答3名のうち2名が「自宅ではパソコンでインターネットを利用しない」とその他の選択肢に○を付けていたため、少なくとも6名は自宅ではパソコンでインターネットを利用していない。

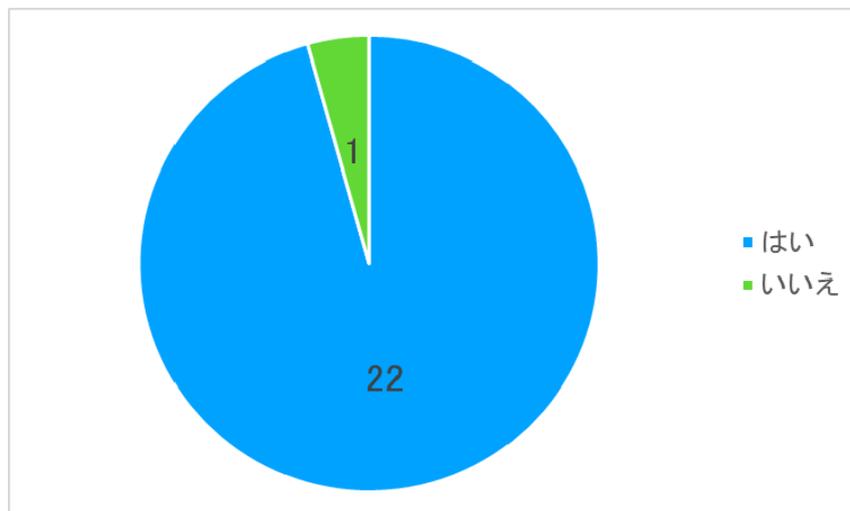


図2 自宅で自分のパソコンを所有しているかどうか

表6 パソコン利用頻度

	回答者数	割合
毎日	4	18.2%
週に5～6日	0	0.0%
週に3～4日	4	18.2%
週に1～2日以下	9	40.9%
パソコン愛好会の際のみ	5	22.7%
計	22	100.0%
不明・無回答	1	

表7 所有する携帯電話の種類

	回答者数	割合
従来型の携帯電話	9	39.1%
スマートフォン	13	56.5%
使用していない	1	4.3%

わからない	0	0.0%
そのほか	0	0.0%
計	23	100.0%
不明・無回答	0	

表8 インターネット利用頻度

	回答者数	割合
毎日	8	40.0%
週に5～6日	1	5.0%
週に3～4日	3	15.0%
週に1～2日以下	4	20.0%
パソコン愛好会のおきのみ	0	0.0%
自宅ではパソコンでインターネットを利用しない	4	20.0%
計	20	100.0%
不明・無回答	3	

(4)性別、年齢、居住地区

性別、年齢構成、現在の居住地区を図3、図4、表9に整理する。年齢の全体平均は69.4歳(男性74.3歳、女性67.5歳)である。

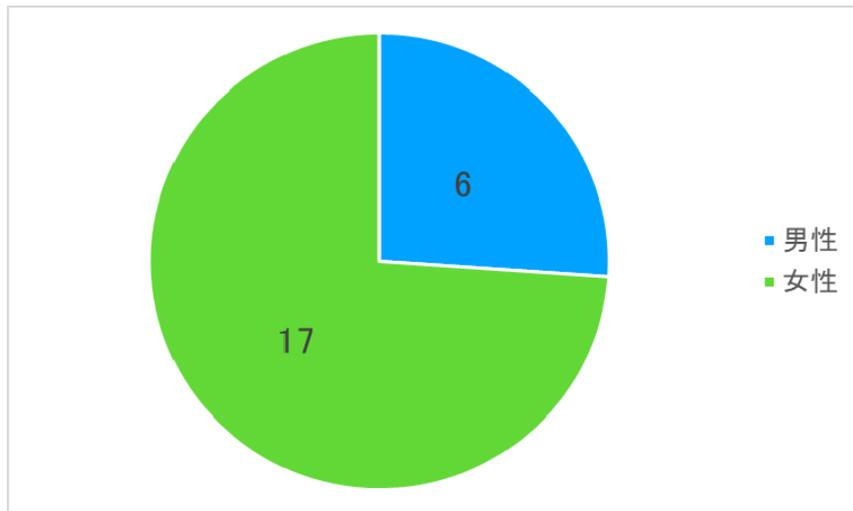


図3 性別

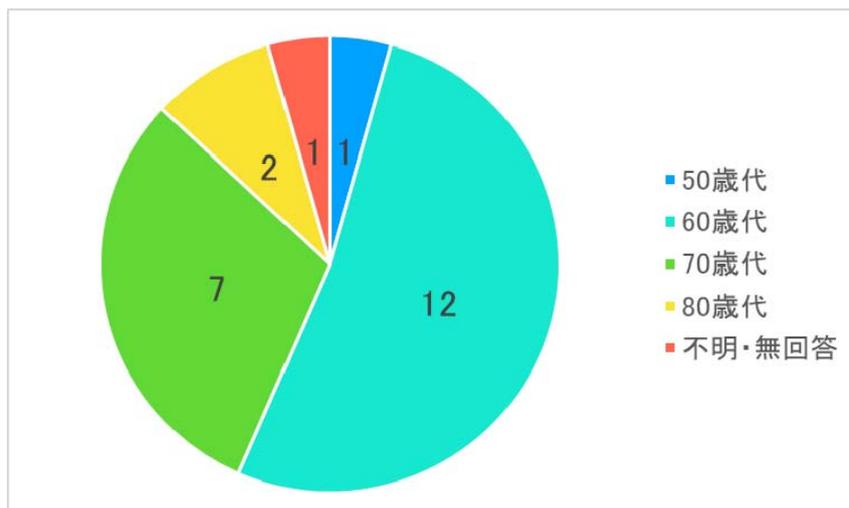


図4 年齢

表9 現在の居住地区

	回答者数	割合
八手庭	1	4.3%
横山	0	0.0%
大平	0	0.0%
小平	1	4.3%
鷺足	0	0.0%
山寺	2	8.7%
山下	1	4.3%
浅生原	3	13.0%
高瀬	3	13.0%
合戦原	5	21.7%
真庭	0	0.0%
久保間	1	4.3%
中山	0	0.0%
下郷	1	4.3%
町	0	0.0%
上平	0	0.0%
牛橋	1	4.3%
花釜	2	8.7%
笠野	0	0.0%
新浜	0	0.0%
中浜	0	0.0%
磯	0	0.0%
つばめの杜東	0	0.0%
つばめの杜西	1	4.3%
そのほか	1	4.3%
計	23	100.0%
不明・無回答	0	

(5) 愛好会以外のサークル活動、地区行事などへの参加状況

山元町内のイベントや教室・講座への参加状況を質問した結果、「興味があるものに可能な範囲で参加して

いる」(13名)が多かった(表10)。また、愛好会以外に参加しているサークル活動の有無については、参加している回答者が17名と多かった(図5)。参加していると回答した人には団体名・活動内容・参加時期・参加理由を質問した。その結果、最も多い人は6つのサークル活動に参加していた。平均すると愛好会以外に2.7個のサークル活動に参加していた。参加時期については震災後から参加しているサークルの数が多かった。

表10 山元町内のイベントへの参加状況

	回答者数	割合
興味があるものに積極的に参加している	5	22.7%
興味があるものに可能な範囲で参加している	13	59.1%
あまり参加していない	4	18.2%
まったく参加していない	0	0.0%
山元町内のイベントや教室・講座を知らない	0	0.0%
そのほか	0	0.0%
計	22	100.0%
不明・無回答	1	

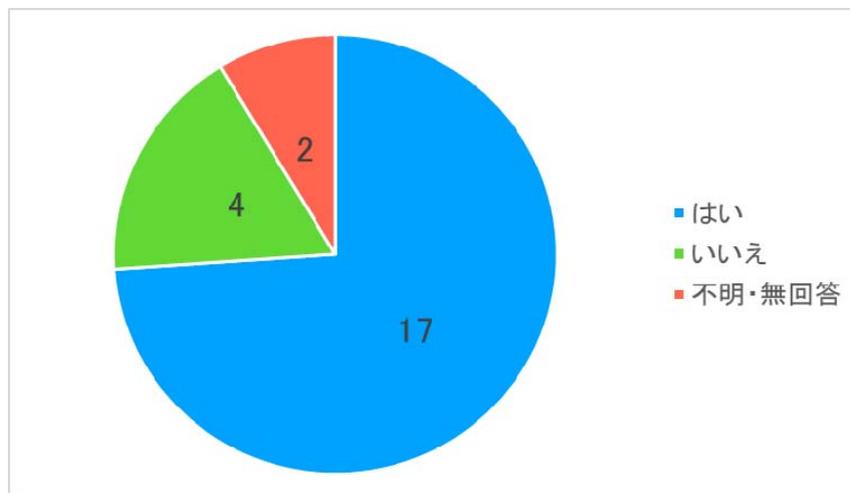


図5 愛好会以外のサークル活動への参加

一方、現在の居住地区の行事や活動への参加状況を質問した結果、「可能な範囲で参加している」(17名)が多かった(表11)。「あまり参加していない」が1名であり、不明・無回答を除けば、地区の活動にまったく参加していない回答者はいなかった。

これらの結果を踏まえると、震災後も山元町内の地域コミュニティは残り、また新たに生まれてもいることが示唆される。

表11 居住地区の活動への参加状況

	回答者数	割合
積極的に参加している	2	10.0%
可能な範囲で参加している	17	85.0%
あまり参加していない	1	5.0%
まったく参加していない	0	0.0%
地区の活動や行事が行われていない、または、それらを知らない	0	0.0%
そのほか	0	0.0%
計	20	100.0%
不明・無回答	3	

愛好会以外のサークル活動や地区活動において、愛好会で学んだことや愛好会の存在が役立ったかどうかを質問したところ、「ブログでボランティア活動の状況を発表出来ている」、「案内状を出したりする際にとっても役立たせて貰ってます」、「写真の取り込み等教えていただいたので、行事の記録に役立ってる」、「活動の報告書を作成することができた」、「区総会資料作成時、防災訓練時の写真を挿入することができて、活動内容をわかりやく出来たこと」、「現在、牛橋区で新区民会館を建設中です。その活用で、パソコン教室も出来る様ですので、協力していく予定です」、「人前で話をするのが苦手でしたが、パソコン愛好会に参加することで、全く知らなかった人と会話する機会が増えた。そのことにより、自然に他の人とも関わられるようになった気がします」などの回答があった。パソコンスキルやコミュニケーションスキルに生かされている。

(6)人的ネットワーク

「家族を含めて現在でも親しくしている方」の数、「地域の中で困りごとや悩み事を相談できる方」の数、「それら以外の頼りになる知り合いの方」の数を質問したところ、それぞれ平均で、22.1、5.6、13.5であった。また、それぞれの最頻値は10、3、2であり、「家族を含めて現在でも親しくしている方」の数と「それら以外の頼りになる知り合いの方」の数については、100という回答がそれぞれ1名ずつあった。

東日本大震災後に山元町外へ引っ越された友人・知人との連絡頻度と手段について質問したところ、連絡頻度は「1年に数回程度」が最も多く、回答者数(22名)のほぼ半数の10名が選択した。次いで、「1か月に数回程度」、「頻繁に」という順番であった(表12)。「そのほか」の選択理由は、町外へ引っ越しされた方がいない、町内に戻っているためであった。連絡手段の多くは電話(携帯含む)やメールといった電子的手段である一方で、手紙や葉書も連絡手段として使用されている。また、「同じサークルに入っている」、「訪ねてくれた時に話す」という回答もあった。

表12 山元町外へ引っ越された友人・知人との連絡頻度

	回答者数	割合
1年に数回程度	10	45.5%
1か月に数回程度	7	31.8%
頻繁に	3	13.6%
そのほか	3	13.6%
不明・無回答	1	

(7)震災後の生活や地域の変化

まず、生活での変化について、東日本大震災前の居住地については、多く(17名)が現在住んでいる地区(山元町内)と同じであった(表13)。「そのほか」の回答者2名は、石巻と、現在は町外であるが震災前は山元町内という回答であった。山元町に何年住んでいるかについては、多く(17名)が20年以上山元町に住んでいる/た(表14)。そのうち1名は震災後に山元町外に引っ越した。震災後に町外の仮設で生活し、現在は山元町内の新市街地に住んでいる回答者も1名あった。近所の方との生活面での協力は、図6のように「変わらない」が多かった。

表13 東日本大震災前の居住地

	回答者数	割合
現在住んでいる地区と同じ	17	73.9%
現在住んでいる地区と異なるが、山元町内	4	17.4%
そのほか	2	8.7%
計	23	100.0%
不明・無回答	0	

表14 山元町での居住年数

	回答者数	割合
1年未満	0	0.0%
1~2年未満	0	0.0%

2～5年未満	2	8.7%
5～10年未満	0	0.0%
10～20年未満	4	17.4%
20年以上	17	73.9%
計	23	100.0%
不明・無回答	0	

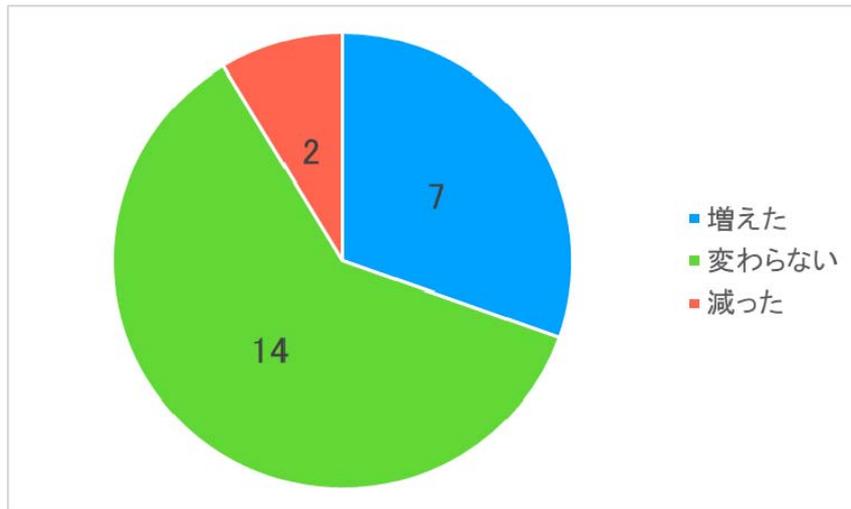


図6 近所の方との生活面での協力

一方、地域の変化について、地区の行事や活動の回数については、「増えた」という回答が半数であり、参加人数については、「増えた」が多いものの、「変わらない」もほぼ同数であった(図7と図8)。先述の通り、これらの地区行事へは可能な範囲で参加している回答者が多かった。

そして、地域への愛着について、「とても感じる」と「ある程度感じる」という回答が多かった(表15)。

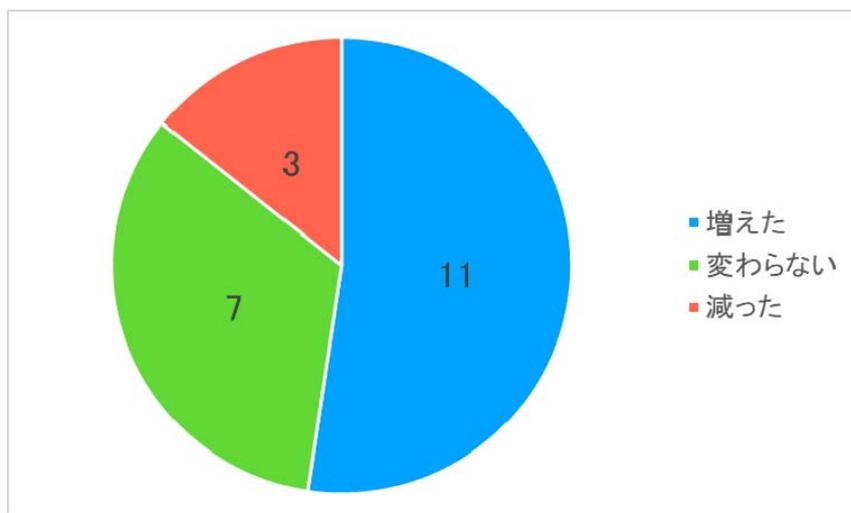


図7 地区の行事や活動

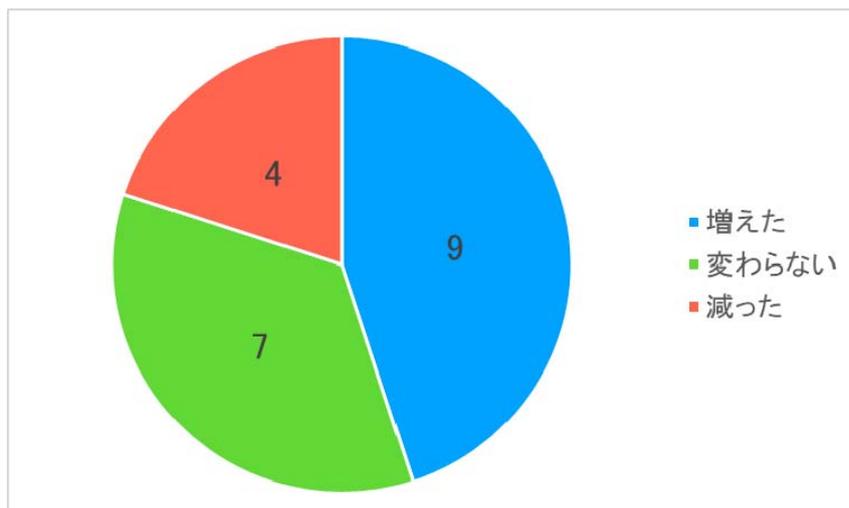


図8 地区の行事や活動への参加人数

表15 地域への愛着

	回答者数	割合
とても感じる	11	50.0%
ある程度感じる	7	31.8%
どちらともいえない	2	9.1%
あまり感じない	2	9.1%
全く感じない	0	0.0%
計	22	100.0%
不明・無回答	1	

5. インタビュー調査

本研究では、山元町パソコン愛好会の参与観察やそのメンバーを対象とした調査票調査では十分に把握できないであろう、山元町パソコン愛好会に対する考えや地域への愛着などを探るため、愛好会メンバー2名にインタビュー調査を行った。ただし、うち1名へのインタビューは多くの人が入り出る公共スペースで行わざるを得なかった。震災後の喪失感やポジティブな生き方などの語りもあったが、今回のインタビューでは内面にまで深く入り込んだ話を伺うことを控え、今後何回かに分けてインタビューさせていただく方針とした(本人からも了解を得ている)。そのため本報告書では、もう1名(Aさん)へのインタビュー調査の結果を中心にまとめる。今後さらに多くのメンバーにインタビューを重ねる必要があるものの、愛好会の影響を考察するうえで有用な意見が得られた。以下に整理する。

Aさんは、仕事上コンピュータを利用しており、またインターネット元年と呼ばれる1995年からパソコンやインターネットを利用している。

パソコンはいつからですかというと、パソコン自体はマルチ処理できるWindowsができたのが3.0、Windows3.0や3.1というもので、そのあとWindows95ができて、ようやく汎用的になってきた。95は1995年、それ以降かな。すごい年数経っているんですね。

その経験から、愛好会ではどちらかと言うと、メンバーからパソコンやインターネットの相談を受ける立場になっている。そして、パソコンは便利な道具であり、「どう使うか」よりも「何ができるのか」を伝えようとしている。

パソコン自体は、機械が好きだということもあるんで、情報をいっぱい取ってこれる、情報を自分で外に出せる、という面ではものすごくいい機械なんで、あくまで道具ですけどね、ぜひうまく利用していきたいな。ただしそこには、怖いところもいっぱいあるんで、その怖いところについては、どういうふうな注意しなきゃいけないかということに関しては自分でも確認しながら、それで他の人に話をするときに、これは気をつけてねというふうな言い方をしながら、やはり使ってほしいなと思いますね。

そして、愛好会やパソコンの活用として、山元町の情報を発信・共有するような、地域密着型アプリについても述べられた。

地域に密着したアプリがあったらいいなあ。行政サービスであったり、子育てだったり、学習だったり、たとえば行政の行事がパーッと見えたり、山元町の基礎知識が出てくるとか、そういう時代がくるのかなあと意識しながら、パソコン愛好会でいろんな知識を深めていければ、こういうのがあるといいねと、進めていけるといいのかなあ。

町外の人に発信する山元町の情報って、山元町のホームページみたいなものではない、もう少し楽に見られるもの。

このインタビューの翌日から、愛好会ではメンバーが知っている山元町やその周辺のイベント情報を集め、それを山元町 SNS にアップすることを開始した。

ところで、A さん自身は山元町出身ではないが、パートナーが山元町出身のため、山元町とは縁が深かった。町民の人柄などが地域への愛着の基礎になっている。

子どもたちを連れて遊びに来たし、そのころのことを近所の人たちは覚えてくれているんですよ。そういう面では、ここの地域の人たちにはかわいがってもらったなあと思っていて、逆にそのこともあって、山元町については愛着を感じています。しばらくここにはいない時期があって、こちらに戻ってきて、戻ってきたら、やっぱりそういうようなことで、受け入れてもらった。

震災後に山元町に戻って以降、地元のことではできるだけお手伝いするようにしており、地域の行事や活動に参加したり、地域の役職を担ったりしている。そういったなかかわりの中で A さんは、町の人たちが表面的な付き合いではなく、本気で接してくれていると感じるようになった。

震災後ということもあると思うが、来てみて、みんな本気で我々のことを考えてくれているんだなあ。そういう接し方をしてくれていたんだなあ。それは変わったのではないですよ。

パソコン愛好会のような団体・活動が地域の関係性に与える影響について、A さんは新しい関係性の構築ツールと見ている。

関係性を取り戻すということよりも、新しいものに飛びついて、自分の周りの新しいものを構築していくという面では、非常にいいことだと思うし、パソコン愛好家であれば、今はやりのことだし、やっているとたぶん便利なこともあるということなので、いい会ではないかな、いいツールではないかなと思うんですが、それが希薄になってしまったもの、あるいは地域として構成できなくなってしまったものを、また元通りにしようというところには働かないんじゃないかな。

町役場や社会福祉協議会などからの働きかけもあり、A さんは、新しい団体づくりは地域内で積極的であると感じている。その一方で、A さんは愛好会のような活動が、元の関係性を取り戻すためにも役立つこともあると感じている。

B さん(愛好会メンバーのひとり)なんかは、元から知っている人を結構連れてきてというようなこと

をやってくれているので、あの人たちにとっては元通りの、お互いの付き合いを復活しようねということに役立っているかもしれない。

6. 考察

本研究では、被災地の地元住民が ICT リテラシーを学びあうための場と、それを生かしてコミュニケーションや情報発信を可能にする地域 SNS を定着させる過程を通し、復興が進展している被災地の地域コミュニティ再生における地域 SNS の可能性を追究することを意図して、山元町パソコン愛好会を対象に、参与観察、地域 SNS 利用状況分析、調査票調査、インタビュー調査を行った。

2011 年 12 月に公表された「山元町震災復興計画」では、学校教育・生涯学習について、家庭・地域・学校の協働のもと、町の将来を担う人材の育成を進めると述べている(山元町 2011)。その一環として、町内の地域づくり活動を活発にするためにも、生涯学習や文化活動などを支援するとある。新しい団体づくりは地域内で積極的であると感じている A さんの意見は町の復興計画に通じるものがある。

そのような町全体の取り組みがある中、本研究を通じ、愛好会はパソコンを学びあうための場であるが、地域の新しい関係性を構築し、またこれまでのつながりを復活させることに寄与しうることが示唆された。実際、調査票調査において、愛好会のどこに満足しているかを質問した結果、「山元町の中で新しい知り合いを作ることができた」を選択した回答者が多く、またインタビューにおいても、A さんはそのことを指摘した。一方で、地域や他団体などの知り合いを、また家族を愛好会に誘うような、これまでのつながりを維持あるいは復活させるような事例もあり、愛好会がコミュニティの構築・維持・再生において機能しうると思われる。パソコンを学びあう場でなくても、このような機能は実現されると思われるが、パソコンという新しいツールを学ぶことによって、その便利さや楽しさを自分のものにし、さらにネットワークを広げていくことも可能であろう。

山元町 SNS の現状は、限られた一部のメンバーが利用することどまっているが、調査票調査において、町外に引っ越された回答者が指摘したように、山元町 SNS は、地域の情報を共有したり、町外に情報発信したりするためのツールとして、その可能性を備えている。たとえば、地域のイベントを収集するルートを確立し、それを見やすく SNS 上で発信するなど、現在の山元町 SNS の不足機能を実装し、それと同時に SNS の利用を促していく必要がある。

7. おわりに

本研究の結果、ICT リテラシー学びあいの場と地域 SNS の結合は、被災地の地域コミュニティの新たな構築・維持・再生に寄与し、またパソコンと SNS というツールによって、地域を離れた人たちとの関係性の維持に寄与しうるものであることを示唆した。

被災地復興のプロセスは現在進行形で続いており、そのため本研究も継続調査を行い、今回の研究成果を深めていかなければならない。その第一歩として、まずはインタビュー調査を進めたい。

【参考文献】

- 山元町 (2018)：山元町震災復興記録誌「復興の歩み」。
- 復興庁 (2016)：「復興・創生期間」における東日本大震災からの復興の基本方針。
- 総務省 (2012)：平成 24 年版情報通信白書。
- 内閣府 (2007)：平成 19 年版国民生活白書。
- 総務省 (2010)：平成 22 年版情報通信白書。
- 日本経済団体連合会 (2011)：復旧・復興と成長に向けた ICT の利活用のあり方。
- 橋爪絢子 (2014)：ICT の利活用は被災地におけるコミュニティの復興に寄与できるか、『Nextcom』Vol.17 2014 Spring, pp.28-37。

服部哲 (2014) : 情報通信技術を活用した地域コミュニティ再生の挑戦, 社会情報学, Vol.2, No. 3, pp. 37-44.

庄司昌彦, 三浦伸也, 須子善彦, 和崎宏 (2007) : 地域 SNS 最前線, アスキー.

山元町 (2011) : 山元町震災復興計画.

〈 発 表 資 料 〉

題 名	掲載誌・学会名等	発表年月
被災地の地域コミュニティ再生のための地域 SNS 利用と分析	2017 年社会情報学会 (SSI) 学会大会, 6 pages	2017 年 9 月